

刊行の辞

先年、冷泉家時雨亭文庫蔵藤原定家自筆『明月記』の補修が終わり、国宝に指定されたのを機に、全巻の展示が行われたのを、東京の五島美術館で拝見した。その折、嘉禄元年（一二二五）分については二月の部分が開かれていた。同月十六日には、前の年の十一月以来家中の女達に書写させていた『源氏物語』五十四帖が終功し、定家はこの日外題を書き、『源氏物語』を賞揚した。しかし、私はその前日の記事に殊に興味を引かれた。定家は次のように書いている。

十五日、天晴風烈、少将有教朝臣明日祈年穀奉幣御劍役事有消息、委示送云々、今日有所思拝夕陽、

西日入山、東月初昇、桜早花一両開、梅花未落、春之風景自然催感（以下略）※以下引用は自筆本に拠る。

「有所思拝夕陽」の表現をどのように考えればよいか。「拝夕陽有所思」であれば尋常であろう。たとえば、

昨日自湯山帰京、寒夜出仕雖有狂氣、有所思可参由示蔵人佐奉行、了（承元二年十月十七日）

の場合は、単純に「考えるとところがあつて」の意に解される。ところが「有所思拝夕陽」は趣が少々異なる。二月の初めには近々九条殿で作文会が行われると聞いて、定家はわざわざ参上、和歌会の開催を勧めている。しかし同月八日には、「愚詩」として、次の詩を書きつけている。

松色遇春、楽成 料知仙算久誇栄 老松伴得抽貞士 三葉狎恩大樹宮

沈淪寿考之身、奉遇三代之新任奉仕、依顧運述懷也（以下略）

十七日には、次のような一日分の記事もある。

十七日、朝雲飛西、雨猶間降、酉時許雷電一声、暁更三条河原東辺有火云々、雨中寂寥、晚梅早桜昨今開、終日風烈、雲奔西北、舟路定有恐歎

この年六十四歳の定家は、久方ぶりの文学的高揚感を感じていたと見える。三十六年前西行の宮川歌合に加判した定家は、西行の

花さへに世をうき草になりにけり散るを惜しめば誘ふ山水

を歎賞したあとで、第四句を「春を惜しめば」としてはどうかと提案し、西行にやんわりと拒絶された。先の「有所思拝夕陽」の表現には、若年からの彼の作歌技法が仄見えるような気がするが、間違っているかしら。

広島大学表現技術プロジェクト研究センターは、今後とも、表象文化研究の観点から、さまざまな表現技術とその根幹にあるものを追究して行くことになる。おおかたのご鞭撻を願ひあげる次第である。

（広島大学表現技術プロジェクト研究センター長 位藤邦生）